

---

『Coula edulis』

幻月 雲母

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

『C o u l a e d u l i s 』

### 【Nコード】

N1047V

### 【作者名】

幻月 雲母

### 【あらすじ】

夏季休業の少し前。彼らが出会った不思議な出来事の話。

クーラ・エデュリスという植物を、知っているだろうか。

まず、この名前を見て感じる感想は「え、ちょ、何こいつかつこいい」だと思う。安心しろ、俺もその感想を抱いた一人だ。

直径三十センチほどの緑色の丸い実をつける樹木、学名『Coul edulis』。英語にすると益々かつこいいと思ったのは俺だけでないと信じている。主に熱帯林で見られる実物は特別かつこいいようなものではない木だ。別に実物を見たことがある訳ではないが、過去に教科書の挿絵や検索サイトで閲覧した限りとてもなく普通だ。

そんな検索サイトで検索するとチンパンジーが絡んでくるか、かつこいいという感想を言われているかなクーラ・エデュリスだが実はそれは俺のあだ名でもあったりする。

俺の苗字がなんとなくクーラに似ていると高校に入学した日、席が目の前だった奴に言われた。全く意味が分からなかった。しかし、俺が呆然としている間にも『クーラ』というあだ名は徐々に浸透して行き、一ヶ月でクラス中、半年で隣のクラス、一年で知り合いの殆どが網羅する状態となり二年生の夏季休業の手前、遂には知らない連中にまでも「よう、クーラ」や「やっほーエデュリス」と呼ばれる始末だ。勘弁して欲しい。

だが、ここで誤解して欲しくないのは別に俺や俺の名前がかっこいいわけではないという点だ。ここだけは譲れない。ただ、なんとなく似ているから『クーラ・エデュリス』なだけで褒め言葉になっている訳でも貶し言葉になっっている訳でもない。

そんな風に、高校生活を送った俺が誰が決めたかも分からない夏

休みという名の学校側からのプレゼントを受け取り終えた日の放課後のことだった。

日はちつとも傾く様子を見せない窓の外を眺めながら机に腰掛けしていると不意に聞き慣れた声が鼓膜を揺らした。

「あれ、エデュリスー、どしたの珍しい」

見慣れてしまった赤いチエツクのスカートをふわりと浮かせ、首を傾げながら歩み寄って来るクラスメイトその一に小さく肩を竦めながら

「さあ」

「なんじゃそら」可笑しそうな顔をして俺の横まで辿り着いて足を止めると奴はにこりを屈託のない笑顔を浮かべた。

茶色掛かった髪を一つに纏めて、左右に揺らすその姿は一年前と殆ど変化がないようにすら思える。忘れもしない、俺に『クーラ・エデュリス』の名を授けた張本人である由原水麗ゆはらすみれがそこに居た。

名付け親は俺の腰掛けている机の下にあった椅子を引き出すと自分で腰を掛け

「部活は」という質疑を行った。

「サボリ」

未だに窓の外を眺めたままそう答えると「あつそ」とだけで彼女は会話を終了させた。

会話も生まれない空間、ただ沈黙だけが流れていく中、隣に居る奴は突然身を屈めるとぴたりと動きを止めた。その行為の意味が理解できず、俺が沈黙を破る。

「どうした」

「エデュリスの鞆動いてない？」

何を言ってるんだか、と一瞬ながら思ったものの足を覗き込むと顔を引き攣らす以外のアクションを起こすことが出来なかった。

紺色のマイ・スクールバッグは確かに右へ左へと傾いては元に戻り、反対側へとまた傾き戻るといづのを永遠と繰り返している。何これ怖い。

「何、犬でも拾ったの」

「いんや」

首を左右に緩く振ったあと、

「空けるか」鞆のチャック部分へと手を掛けた。手前にチャックを引くと、鞆が開き、中身が露わになる。

教科書や筆箱の間に『居た』、“それら”に言葉を失うことしか出来なくなった。

人間は自分に予測のつかない事態に巡り合うと逃げ出したり、隠れたりする習性があるらしい。

俺も人間らしく逃げ出したり、隠れたりしたかったが生憎、この教室にはそんなことの出来る場所も物もなかった。俺は固まるといふ高等手段を選ばざるを得なかった。

そこに居たのは猫で、犬でもインコでもトカゲでもセキセイインコでもなく、紛れも無い。

人、だった。

手乗り、と呼べるほどの小さなサイズの人、小さいけれど紛れもなく人の形をしたそいつらは俺の鞆の中で揉み合っている最中だった。そいつら、というくらいなので勿論一人ではなく二人だった。片方は漆黒のスーツに身を包み、片方は青色のジャケットを羽織って俺の鞆の中で揉み合っていた。

こういう奴らは、あれか、小人か。と俺が一人回答を導き出したあとに劈くような高い声が俺の鼓膜をこれでもかというくらいに揺らした。

「ここに、小人！ エデュリスの鞆から小人が出たああああっ」

人は、自分よりパニツクに陥っている奴を見ると落ち着くと聞い

だがそれはどうやら本当らしい。

椅子から腰を浮かせて一人あわわあば言ってる奴を眺めるうちに俺の心境は大分本来のあるべき落ち着きを取り戻し、彼らを観察する程度の余裕も生まれた。

スーツ姿の方は黒い髪に黒い瞳という黒尽くめで、サイズ的には乳幼児にすら劣るが見た目だけ見るなら二十歳ぐらいの青年には見えなくもなかった。彼は俺に見つかったのに気付いたのかも片方の襟首を掴んでいた手をパツと離すと肩や裾をパタパタと払って俺を見た。

もう片方のジャケットはオレンジ色の髪を一つ結びにして、茶色掛かった黒い瞳で俺をきらきらと見ている最中だった。こちらも見ただけなら二十歳程度の青年だ。

「うっさい」

俺の一蹴されたことで彼女は初めて動きを止め、おろおろと辺りを見渡してから椅子に再び腰を下ろし

「あ、貴方達はなんなの？」

まるで悪役に遭遇した正義の味方のような問い掛けを小さな彼らにも垂らした。二人はお互いの顔を見合わせると頷き合い、一拍置いてからそこでジャケットの方が

「願い事を叶えるぞ」

どうだ凄いだろう、と言わんばかりの顔にリアクションに困る、高校二年生の、夏。

とか心の中でふざけている俺とは対照的に「こ、これは夢！ その絶対夢！」と俺にあだ名を与えた女は自身の頬を抓り痛がっていた。ジャケットは彼女より俺に話したほうがいいとでも判断したのか鞆の淵に置かれたままだった俺の手をちょんちょんと突付いた。

「ん？」

「叶えるんだぞ、凄く叶えるぞっ」

だから褒めると言いたげな素晴らしいどや顔に「凄いな」としか答えられない俺である。

スーツの方もようやく、こちらに首を向けるとそこで初めて音声を発した。

「願い事を叶えます」

「さいですか。」

淡々とした口調でそういわれて凄いことの筈なのに返事をするか寝るかしか行動パターンが与えられていないような気がして顔を顰めた。

彼らはもう一度互いの顔を見合わせてから

「机の上上げて頂けますか」「机に乗っけるっ」

口調こそ違えど指示することは同じだったので二人を摘み上げ、ご所望通り机の上に座らせる。それぞれが互いに距離を取り合うのを見てから夢から覚めなかった女が俺の背から顔を覗き込ませて問う。

「な、なんでエデュリスの願い事を叶えに来たんですか」

その問いに少し困ったように首を傾げ、二秒三秒四秒……といった具合に秒針の動きだけをこちらに感じさせてから

「上からの命令だから……？」とジャケットが質疑を同時に行った。というか、何上司が居るのか。というどうしようもないことを気にしている俺とは裏腹に名付け親が身を乗り出して

「名前、ねえ名前は」と無意味にきらきらと輝いた瞳を向けている。どうやら開き直すことにしたらしい。

「クーラ」

「オレオーサっ」

渋々といった様子のスーツとまたしても何処か自慢げなジャケットだったが俺には前者のスーツの名前が引っかかった。

『クーラ』、つまり俺のあだ名と全く同じである。まあ、だからと言つて別に特別な意味はないんだろっな、と思っていたが「と名乗れとボツソウに言われました」

「ボツソウ？」

「おっつ。なんかな、全身毛だらけの真っ白いやつでな、一応偉い

んだぞ」

上司すらも自慢げに紹介するジャケット、ことオレオーサだったがそれと対照的にスーツことクーラは「願い事を叶える人間が可愛がりやすい名前を名乗れと言われました」

成る程、つまりは親切心を装った嫌がらせか。いらん敵意を、そのボツソウとかいう奴らの上司に抱きつつも

「ファンタジーな存在だな」

と改めて感想を述べる。

「そうだぞ、俺達はふぁんたじーでちつくくてだけど凄く願い事を叶えるんだぞっ」

期待と自信に満ち溢れた気持ちで全身で表現しながらそう言い放つオレオーサを一瞥してからクーラが黙ってこちらを見上げて来る。オレオーサを名付け親が指で突付いて遊んでいるところに「忘れものー」という鼻歌交じりの声と共にクラスメイトその二が姿を現した。

他人が妙な出来事に遭遇しているとき、人はどう行動するのだろうか。

その人達に危険が及んでいれば助ける者も居れば、そのまま見知らぬフリをして通り過ぎるものもいるだろう。また、逆に別に危険でもないけど珍妙な出来事に遭遇している場合は興味本位で近付いて来たり、逆に関わりたくない一方でやはり逃げる者も居るだろう。クラスメイトその二こと南川芳帆みながわよしほは後者のパターンに巡り合った場合近づいてくるタイプの人間だった。

俺と彼女が熱心に机を覗き込んでいるからか、面白そうに

「何やってんだ？」

とこちらまで歩み寄り、机を見てから顔を引き攣らせた。

「なんかちっこいのが居るぞ！ なんじゃこれ！」



「あーあー、南川、耳元でうっさーい」

クーラとオレオーサの存在をワントンポ遅く知った芳帆は二人を遠くから眺め、近距離で眺め、手にとつて眺めを繰り返した挙句「よし、これは何かの間違いだ」とまで言い出した。

「何も間違つてないぞ」

一応こう言つてみたものの「いや、間違つてるんだ」と聞き入れるつもりも無いらしいので彼は無視の方針で決まってしまう。

その内に痺れを切らしたのかオレオーサがこちらに身を乗り出すと「んで、結局お前の願ひ事はなんなんだ」

何でも叶えてみせる、といわんばかりの表情に「んー」と言葉を濁す。そんな俺を見たからか由原水麗は

「エデュリスじゃなくてあたしの願ひ事じゃ駄目なの」  
「聞くだけならいいぞ」

胸を叩いてにっかりと笑うオレオーサに「あ、じゃあね、あのね！」ととても嬉しそうに自分の願ひ事を話し出す彼女。

そんな様子を見て楽しそうだとも思つたのか

「あ、俺も俺もー」と芳帆が加わつて行くのを見ていると「いいんですか」

先程まで沈黙を保つていたクーラが俺を見上げてそう告げた。

今頃、写真に収めるといふ発想が生まれたらしい彼女と芳帆は力メラを取りに教室を飛び出してしまつていた。一人残されたオレオーサは退屈そうにこちらを眺めていた。

「何が」

「願ひ事ですよ」

綺麗な黒い瞳を見てから

「俺と同じ名前だから案外知つてたりするんじゃないの」

と冗談交じりに言つてみる。だが返答は意外なもので

「ええ、知つてます」

「じゃあそれが一番なんだけど」

「それが出来ないから別の願ひ事を聞いてくるように、というのが

上からの命令です」

笑いもせず、苦しみもせず、嫌悪も見せず。

ただ淡々と機械的にそう俺に言うクーラに俺のほうが苦笑する。

「案外厳しいんだな」

「僕らには貴方の願い事は叶えられない」

「でも俺も別の願い事が今のところ無いんだ」

じつと、こちらを見ていたクーラが息を止めたかのように動かないくなり、俺も何も言わなくなる。

「そうですか」

やがて吐き出すようにそう締められた会話は余韻を残さずに消え、

「オレオーサ」

「おうっ」

「帰りますよ」

迷わずクーラの足が、窓の方へと向けられる。

突然の帰宅宣言にオレオーサは目を見開いてからクーラの肩を掴んだ。

「なんでだよ」

「今の彼は現状で満足しているそうですから」

「でも願い事は……」

「そんなものなんとでもします」

淡々と回答を述べてから彼はこちらに振り向き、最後の最後で。

僅かに口元で弧を描きながら、俺に言い放った。

「精々、頑張ってください」

それから二人が居なくなるのに、五秒と要さなかった。一瞬ばかり目を離したら、もうそこには何もおらず、夢だとすら思えた。い

や、寧ろ夢だったのかもしれない。

だが、事実これは現実だったらしく教室へと戻って来た二人が肩を落としたところを見てもそれが伺える。

そこから暫く他愛も無い話が続き、全校生徒の帰宅を告げるチャイムが校内に鳴り響くのはそこまで先の出来事でもなかったかのよう  
うに思える。

「んじゃねー」

「じゃ、お先に」

用事があるから、と教室を出て、二人とは直ぐ別れた。

遠くなる背中を眺めているとうち一人がこちらに振り返り、大きく手を振りながら大声で

「またねーっ」

その言葉に、思わず溜め息を零してから手を振り返す。

俺のそんな返答に満足したのかその後はもう何も言われなかったし、俺も何も言わなかった。

「さて、と」

本当はもう少し早く、行くつもりだったんだ。

ズボンのポケットに突っ込んでいた封筒を、黙って握り締めた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1047v/>

---

『Coula edulis』

2011年8月3日03時19分発行